

万灯行列に関する研究

一日蓮宗のお会式における万灯行列のお囃子と纏の動きについて—

和田 春 恵

はじめに

毎年10月12日には、東京の池上本門寺でお会式のお逮夜（前夜祭）として、万灯行列が行われている。それは、日蓮聖人が亡くなった13日の前夜から未明にかけて、全国から集まった100余の団体（万灯講中）が繰り広げる行列である。この行列は、万灯をかざし、太鼓や鉦、笛を鳴らすお囃子と纏振りで成り立っている。

筆者は、4年前に万灯行列のお囃子の振り付けを頼まれたことをきっかけに興味を持ち始めた。この万灯行列において花形とも言える中心的な存在になっているのが、纏振りである。それぞれの万灯講中により色や形が工夫された纏を、いとも簡単に回したり、振り上げたりと、自由自在に操る姿も大に見物客を引きつけるものである。

そこで、お囃子にはどのようなリズムがあり、どのような曲が多く使われているのか、また、纏にはどのような動きがあるのかを探ってみたいと考え、調査を行った。

研究方法

1 文献による調査

2 指導用VTRによる分析

- ①日蓮宗新聞社発行「池上のお会式」のVTR。
- ②基本的な動きの習得場面をVTR収録したもの。

3 実態調査

平成11年10月12日に行われた池上本門寺の万灯行

列をVTR撮影し調査分析。

4 池上本睦会^(注)へのインタビューによる調査。

《お会式について》

法華経の布教「立正安国論」の幕府への進言により、波瀾万丈の生涯を過ごした日蓮聖人は、病に侵され、弘安5年（1282年）9月8日、9ヶ年の間住み慣れた身延の山を後にし、日立の湯治に向かうべく旅立った。9月18日池上（東京大田区）に着いてから病は更に重くなり、10月13日この地（池上）で亡くなった。それ以来、毎年、日蓮聖人の命日には、弟子信者たちが法要を営み、報恩の儀式をあげてきた。現在では命日やその前の晩であるお逮夜の法要儀式を「お会式」と呼んでいる¹⁾。

つまり、お会式とは、日蓮聖人の生涯を忍び、感謝を捧げる行事で、纏を先頭に、桜の花で飾った万灯を掲げ、うちわ太鼓でお題目を唱えながら、日蓮聖人ゆかりのお寺にお参りすることを言う。古くは御影講、大命講とも呼ばれた²⁾。

《万灯行列について》

元禄の頃、江戸の町人文化はしだいに活発になり、京都の祇園祭と大阪の天満祭と江戸の神田祭とを日本の三大祭と呼ぶようになり、大変な賑わいを見せた³⁾。また、伊勢神宮を参詣するお蔭参りや熊野、善光寺詣でが流行したこともあり、池上本門寺のお会式も「祭りと喧嘩は江戸の華」と言われるように、その風潮にのって年々盛んになり、江戸の名物として、天下にその名を轟かせた。

日蓮聖人に対する報恩感謝の現れがお会式であることはもちろんであるが、聖人の死を悲しむといっ

たような消極的な態度ではなく、「日蓮聖人が教えられたように、このように元気に、活発に法華経を保っておりますよ」「こんなに威勢よくお題目を唱えておりますよ」という積極性こそ、日蓮信徒の持すべき態度である、ということができる⁴⁾。

現在では、全国から信者が多数参拝に訪れて賑わいを見せている。なかでも、夜通し行われる万灯行列は、本門寺の広い境内が見物客で埋め尽くされるほどであり、万灯の灯りが闇に映えお囃子の音が響きわたり、それは見事である。

調査結果

I 万灯行列の衣装について

万灯行列の衣装は図1で示すものが挙げられる。

まず、江戸時代の頃からとび職の衣装として知られている、鯉口シャツに腹掛け、股引き、足もとは地下足袋というスタイルのもの。また、無地のものや柄をあしらった鯉口シャツとズボンに雪駄をはいたスタイルのもの。また、男性は腹巻き、女性はTシャツの上に、背中にそれぞれの講中の印が描かれている印絆纏を羽織り、雪駄を履くといったスタイルのものが挙げられる。

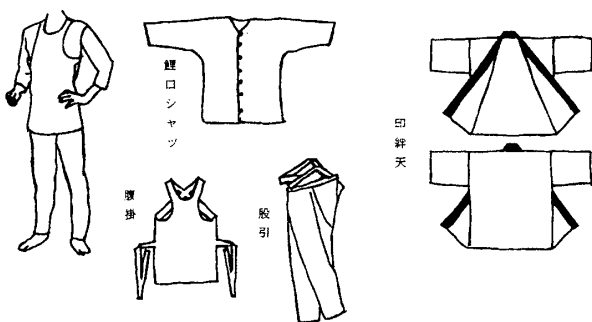


図1 服装

II 万灯行列の形態について

万灯行列は万灯、纏、お囃子、の三つで成り立っている。

そこで、次にこれらの三つについて詳しく述べることにする。

1 万灯について

日蓮聖人が亡くなった日、池上では秋だというのに時ならずも桜の花が咲き誇った⁵⁾ という故事から、桜の花になぞらえた万灯が灯されるようになった。つまり、万灯とは聖人に灯明を捧げることが元の意味である。

「お会式」につき物のこの万灯は、から傘を広げ、その骨に桜をかたどった会式花（造花）を柳の枝のように垂らし、傘の柄の部分に提灯のような物をつけて灯明を灯す。たくさんの灯明を一度に捧げたいために、いくつもの提灯をまとめるようになっている。万灯のもう一つの意味は、万もの数の灯明、たくさんの灯明ということである。

戦前は、俗に「唐辛子万灯」と呼ばれる手製の万灯をかついで参詣する信者で賑わったお会式も、最近では何百万円もする御神輿のような万灯が多くなり、ローソクの代わりにバッテリーを電源とする電球、それも数秒おきに点滅するうえに、赤、黄、青といった電球を使う、カラフルな電灯つき万灯となっている⁶⁾。

今回の調査において、万灯の形態にも様々なものが見られた。五重塔形式や、提灯を重ねいくつも組み合わせたものなど、それぞれの万灯講中により工夫されている。また、提灯の表面には日蓮聖人の生涯を図に表したものや、聖人の言葉を引用したもの等が描かれ、灯りで浮かび上がるようになっており、夜通し行われるこの行列をさらに美しく引き立たせるものになっている。

2 纏について

纏は、近世以前は戦場において、大将の居場所を明示する道具であったが、江戸時代には、消防夫が組のしるしとして使うようになった、とされている。火事の際、纏を持って屋根に登り、降りかかる火の粉を馬簾ではらいながら石突きで屋根を突き破り、延焼を抑えた。その際、消火に当たった消防夫たちが、自分の組の纏を消し口に立ててアピールした。正に、江戸時代のいなせな火消しの象徴であった。

その纏が、日蓮聖人の命日であるお会式で使われるようになった理由は、自分たちの講中をアピール

することはもちろんであるが、人々の意気や気風を高め、励まし、元気づけるという日蓮聖人の教えに基づくものと考えられる。

纏は図2に示すとおりである。頭の部分を陀志と呼び、櫓の木でできた心棒と一番下にある石突きを握り、動かすことにより、馬簾を回したり巻きつけたりするものである。

陀志の中はそれぞれの講中により工夫されている。纏の重さは5～13kgあり、特に、陀志の部分が重いので、中をくり抜いて軽くしているものや、最近では、F.R.P.(強化プラスチック)を使用しているところが多い。これは、見た目には重々しく見えるが、重量的に改良され、軽く仕上がっているためである。また、色も工夫され、回すたびに光にキラキラと反射するように金色でできているものが多くみられた。

またバランスとしては、上部から3分の1位の所に中心がくるものが良いとされている。

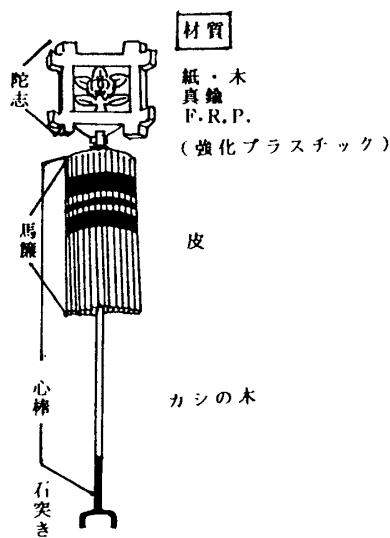


図2 纏

3 お囃子について

①楽器について

万灯行列におけるお囃子は笛でメロディーを奏で、太鼓や鉦を打ち鳴らしながら練り歩くものであり、纏の動きを賑やかに引き立てる役目も持っている。

i 柄付き太鼓とうちわ太鼓（図3～5参照）

柄付き太鼓は直径約30cm、うちわ太鼓は直径21～60cmと大小さまざまな物があり、ほとんどの講中で十数

台使用している。また、表叩き、裏叩きのいくつかのリズムを出し合い、太鼓だけでも複雑に音が絡み合っている。中でも、大きなうちわ太鼓は音質が低く、響きわたるためベースとして使われる場合が多い。

ii 鉦（図6参照）

これはお囃子の号令をかけるもので、片手で持てるほどの小さい楽器であり図7のように、中心部および内側の部分にばちを当てることにより「チンチン」という音が出せるものである。また、手首を軽く左右に動かすことで、細かく音が出せるため、速いリズムのもの、特に符点を使う場合に便利である。

iii 笛（図8参照）

これは、長さ40センチ前後と小さい横笛で、メロディーをふくものであり、太鼓や鉦のリズムを抑える役目を持っている。

iv ホイッスル

ホイッスルを楽器として使用している講中も多い。これは、特に広範囲に響きわたるため、お囃子を盛り上げるものとして、かなり効果的である。

尚、かけ声や合いの手なども、お囃子の一部として大いに盛り上げを見せている。これは、自分の万灯講中の纏振りに対する応援の気持ちや、沿道の見物客へのアピールする気持ちがかかけ声となって出てくる。また逆に、見物客からの応援を受けて、さらに盛り上がり、それまで以上の声となって出てくる。まさに、見物客との一体感を味わうことのできる、お囃子の中の大事な部分である。

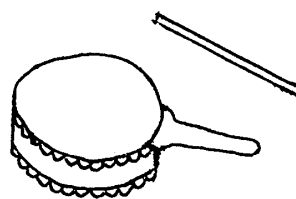


図3 柄付き太鼓

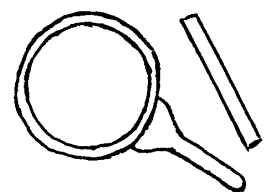


図4 うちわ太鼓

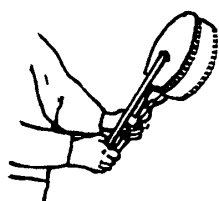


図5 叩き方

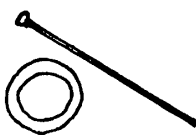


図6 鉦

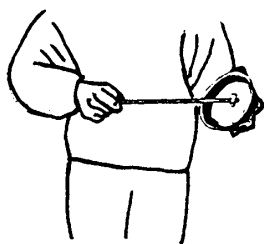


図7 叩き方

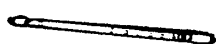


図8 横笛

②曲とリズムについて

万灯行列で使われる曲として、図9「南部」、図10「八木節」、図11「ほたるこい」の三つが挙げられる(日蓮宗新聞社発行のビデオにより紹介された池上本睦会の演奏によるお囃子を採譜した)。

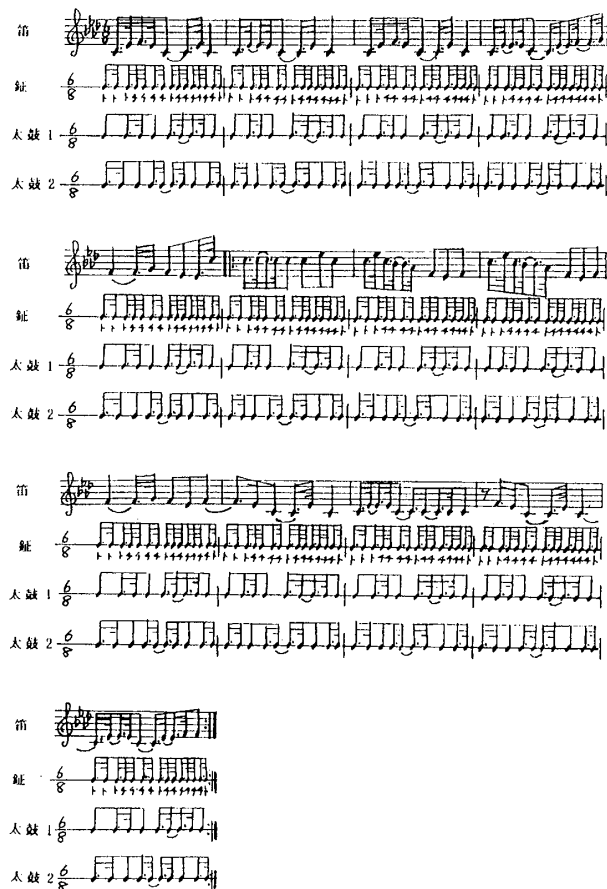


図9 万灯のお囃子「南部」



図10 万灯のお囃子「八木節」



図11 万灯のお囃子「ほたるこい」

4 ビデオ撮影による分析

平成11年10月12日、午後6:30より9:30までの3時間、最終地点付近で万灯行列をビデオ撮影した。

この日、全国から100余の参加があったと報告された。そこで、この3時間の間に祖師堂に到着した30の万灯講中の内、お題目だけを唱えて行列した2団体を除く28の万灯講中について分析した。

今回撮影した28の万灯講中について、お囃子に使った曲、及び使用した楽器とかけ声、また、纏の数を表1のようにまとめた。但し曲については、すべての講中が笛を使用していたわけではないため、ま

た、いくつもの万灯講中の音が重なっていたため、正確にメロディーがわからないものもあったが、曲のパターンを集計した際、鉦や太鼓のリズムが南部または八木節と同じたたきかたをしていたものは同一とみなした。

その結果、一番よく使われていたのは「南部」で、28中17と6割以上、「八木節」が14となり、両方使っていたところが4講中あった。また、この2曲に当てはまらない6拍子、4拍子、3拍子のものがあった。しかし、ビデオで紹介された「はたるこい」は使われていなかった。

この結果について、池上本睦会のインタビューにより次のことが明らかになった。

行列の際、本門寺の山門をくぐったらお囃子は「南部」を使うのが原則である。また、「はたるこい」は帰り万灯と呼び祖師堂到着後、参拝し、帰るときに使うものであるとのことであった。

次に、使用している楽器としては、笛の使用が17講中、鉦が26講中あり、太鼓はすべての講中で使用していた。また、ホイッスルを使ったところが8団体あったが、これは、広い範囲に響きわたり、お囃子を盛り上げるには効果的である。さらに、かけ声も「ハードッコイ」や、「ソレソレ」などの合いの手から「ヨーヨイヤサノヨイヤササ」のように太鼓や鉦のリズムを歌うものなど、様々なものがあった。

表1 万灯行列(28講中)におけるお囃子の曲・使用楽器および纏の数

曲	使用楽器	ありあ 合いの手	曲	使用楽器	ありあ 合いの手
1 2	ハ		2 15	イ ロ ハ	
2 4	イ ロ ハ ニ		2 16	イ ロ ハ	
3 2	ロ ハ ニ		3 17	イ ロ ハ	
4 1 2	ロ ハ ニ	ヨ・ヨイヤサノヨイヤサ	3 18	イ ロ ハ	
5 1 2 5	イ ロ ハ ニ	ハ・ソレ	1 19	イ ロ ハ	
6 1	イ ロ ハ		2 20	イ ロ ハ	
7 1	イ ロ ハ ニ		2 21	ロ ハ	
8 2	ロ ハ ニ		3 22	イ ロ ハ ニ	ソレ・サ・サ・サ
9 1 2	ロ ハ		1 23	イ ロ ハ	
10 2	イ ロ ハ ニ	ソレ・ヨ・ヨイヤサノヨイヤサ	2 24	ロ ハ ニ	ソレソレ
11 6	ハ		2 25	イ ロ ハ	
12 2	ロ ハ ニ		1 26	イ ロ ハ ニ	ヨ・ヨイヤサノヨイヤサ
13 1	イ ロ ハ		2 27	ロ ハ ニ	ハ・ソレソレ
14 1	イ ロ ハ		2 28	イ ロ ハ ニ	ハ・ハ・ハ

(曲) 1 《南部 - 6 拍子》
2 《八木節 - 4 拍子》
3 《はたるこい - 4・2 拍子》
4 《その他の3拍子》
5 《その他の4拍子》
6 《その他の3拍子》

(楽器) イー 笛
ロ 鉦
ハ 太鼓
ニ ホイッスル
ホー かけ声・合いの手

纏の数は表1のとおりであるが、この他に小学校高学年から中学生と思われる若者が小さめの纏を振っている講中がいくつかあった。

5 纏の動きについて(動き方及びポイントは池上本睦会の指導によるものである)

＜纏の持ち方＞(図12参照)

- ・脚幅は肩幅よりやや広めに開く。
 - ・右手の親指と人差し指で石突きを挟むように握りおへその前で構え、左手は逆手(外側から挟むように)で持ち、目の高さで構える。
- 次に、纏の基本的な動きをいくつか紹介する。

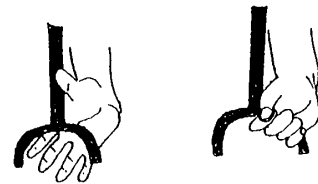


図12 纏の持ち方

＜纏の回し方＞(図13参照)

- ・脚幅を肩幅の倍近くにし、腰を低く落とす。
- ・左手は最初に握った位置よりやや下にする。
- ・右手の親指を上げながら、手首の上を左方向に回す。

この動きを繰り返すことにより、心棒を中心に纏を同じ方向に何度も回すことができる。その際、腕全体を上を引き上げることにより、馬簾の部分が綺麗に引き上がり、広がった状態になる。

但し、30年前以前は、石突きを持たず両手で心棒を持ち、雑巾を絞るような状態で振っていたとのことである。



図13 纏の回し方

ポイントとしては

- ・ 右の脇をしめる。
- ・ 左手が上がらないようにする。(纏が長いのでバランスがとりにくく、慣れないと高くなってしまう)
- ・ 回しているときは顔は正面を向く。(慣れないと上が気になるが、正面を向けるようにする)
- ・ 膝を柔らかく曲げやすい状態にし、スムーズに重心移動を行う。纏が左にある状態の時は左脚に、右に移動するときは右脚に重心をスムーズに移動させる。
- ・ 腰と膝を柔軟にし、手首をうまく調節しながら、重い纏のバランスをつかむ。
- ・ 重い纏は軽そうに、軽い纏は重そうに振ることが上手に見せるやり方である。

<纏の返し方> (図14参照)

- ・ 左回しを何回か行った後、右手首が左の方に行ったと同時に、左脚を後方に引き重心を乗せ、纏を左に抱えるようにする(図14¹⁾)。
- ・ 次に、右脚を後方に引きながら、重心を移し纏も右に移動させる(図14^{2) 3)})。
- ・ 石突きを持った右手を高く上げながら、目の前で

右手首の上を右方向に一回転させる(図14⁴⁾)。

- ・ その直後に、左手を逆手から順手に持ち替え(図14⁵⁾) 纏を右肩の後ろから背中の方へ引き、重心は、右脚から左脚へと移す(図14⁶⁾)。
- ・ 次に、後方に充分引いた纏を重心と共に前方に力強く移動させる(図14⁷⁾)。その際、右手首を前方では内側に、後方では外側に大きく返しながる行うことにより、馬簾が心棒に巻き付けられ、また反転して巻き付けられる、という動きを繰り返すことができる。

また、この動きを心棒を後ろにした状態で膝を深く曲げ、腰を落として行う場合もある(図14⁸⁾)。

ポイントとしては

- ・ 左回しから反転が変わるときには、左脚、右脚と後方に大きく引き、重心移動をしっかり行う。
- ・ 左手は逆手から順手に持ち替えた後は、纏の心棒を強く握らず、纏全体の上から3分の1辺りの位置で滑らせるようにしておく。
- ・ 纏を反転させるときは腰を低く落とし、膝を深く曲げながら前後に大きく移動する。また、右腕は軽く伸ばした状態で低く落とし、肘に纏の心棒を巻き付けるようにしながら行う。

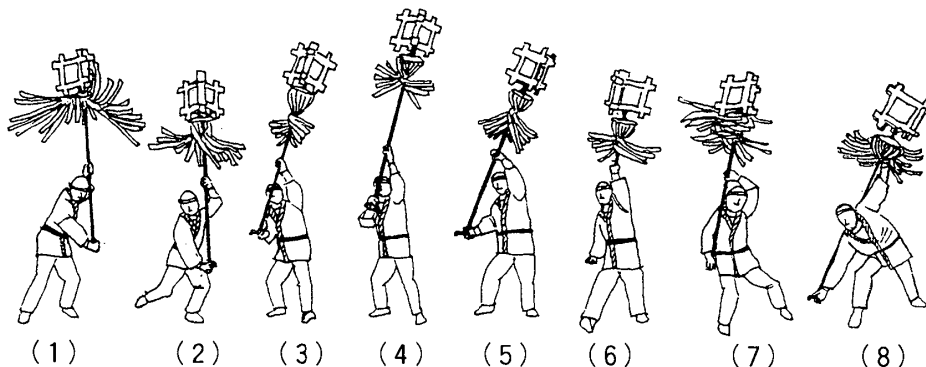


図14 纏の返し方

<逆さ前回し> (筆者独自の呼び方：図15参照)

- ・反転の動きで後ろに引いた後、腰を低くしながら左脚に重心をかけ、纏を背中に抱えるように準備する (図15¹⁾)。
- ・左脚で体重を支えながら、纏の頭の部分が後ろか

ら前に向かって円を描くように地面すれすれのところまで振り下ろし、すぐに引き上げる (図15²⁾ ~ ⁴⁾)。この動きを繰り返し行う場合、図15⁵⁾から続ける。

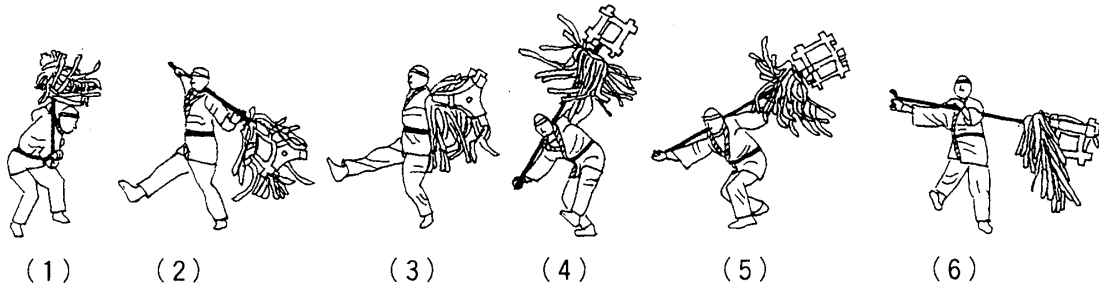


図15 纏の逆さ前回し

ポイントとしては

- ・5～13kgもある纏を振り回すことで腰にかなりの負担がかかるため、膝を柔らかく使いクッションの代わりにする。
- ・左手で心棒をしっかり支え、纏をすくい上げるように行う。
- ・この振り方を繰り返す場合、纏振り自身が右方向に自転しながら行う場合が多い。

以上の振り方と同じやり方で、纏を背中の後ろではなく、胸の前で操る方法がある。(図15⁶⁾参照) これは心棒を手で持つのではなく、肘にかけて行うものである。

以上、基本的な動き方を挙げてみたが、実際の万灯行列では、それぞれの万灯講中により様々な動きの工夫がみられた。

次に、纏の動かし方で特に目立ったものを、図解と共にいくつか紹介する。

図17で示すように2人で向かい合い、左方向に回転しながら、反転の動きを行う方法である。その際、後ろから前に向かって纏を出すときに、右膝を深く曲げながら脚を大きく前に踏み出し、お互いの纏を近づけるようにして動く。

この動き方は、いくつかの万灯講中が行っているが、より低い姿勢で、纏の心棒を交差させている動きは、バランスがとれており美しいものである。

<逆さ後ろ回し> (筆者独自の呼び方：図16参照)

- ・左手を高く上げた状態から行うもので、左脚を踏み込みながら心棒を持っている左手をおろし、右手を上げながら、前から後ろに向かって円を描くように振り上げる。

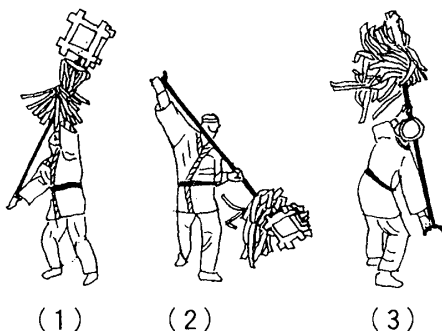


図16 纏の逆さ後ろ回し

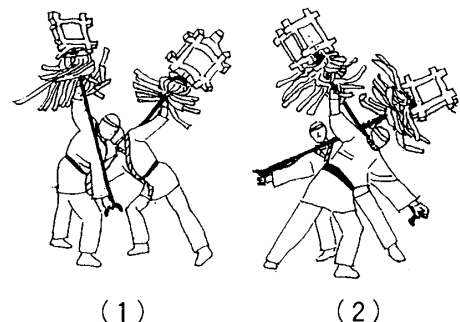


図17 2人で行う返し

また、これとは逆に交互に行うものもある。一人が重心を前脚にかけて近づこうとすると、もう一人は後ろ脚に重心を寄せ、纏を引きながら離れようとする、というやり方である。

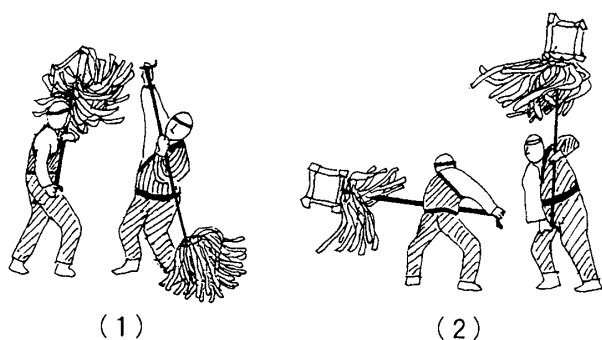


図18 2人で行う逆さ前回り

図18のように2人で逆さ前回りを行っているものである。これは、肘にかけて振り上げるやり方を、1人が纏を振り下ろしたら、他の人は纏を振り上げる、といった具合に、タイミングをずらしながら行う。まるで2人で車輪を回している、という印象の動きであった。お互いの右脇を中心に向け、2人で右方向に回転しており、かなり熟練した動き方であると思われる。

また、特に目立ったものとして、首の周りをまるでバトントワラーがバトンを簡単にくるくると回すように、重く、長い纏を軽々と何回も回すという動きで、見物客はかけ声と共に大きな拍手を送っていた。

次に挙げるものは、見物客へのアピールや盛り上げを意識して行ったと思われる講中で、八木節をアレンジしたものを、途切れることなく鳴らし続けながら次のように行っていた。

まず、纏振りが2人おり、それぞれの纏振りを中心に、10～15人で囲み、八木節のリズムに合わせて体全体を弾ませている。特に、各小節の4拍目では両手を上げながら、「ソーレ」とかけ声をかけ、さらに大きく飛び跳ねる。

続いて、お囃子の大部隊が登場する。まず、笛が約40名、鉦が約15名、太鼓が約25名で、先頭から4列縦隊になり、それぞれ自分の楽器を鳴らしながら行進している。その際、体もリズムに合わせて弾ませながら左右に振り、左、右と一歩ずつ前進していく。

次に、白い花で飾った万灯を持った人と、それを囲む10～15人が、やはりリズムに合わせてかけ声と

共に飛び跳ねる。

最後に、白とブルーで飾った移動式の万灯を2～3人で引いていく、という形態になっている。また、この講中の特徴として、衣装の工夫が挙げられる。

先頭の纏のグループ、お囃子の笛、鉦、太鼓、最後に万灯と、それぞれ自分の担当するものにより法被や襷掛けの色を変えていた。さらにこの講中の最大の盛り上げは、祖師堂前で全員が密集し、5分以上にも及び八木節を演奏しながら飛び跳ね、徐々に速度を上げながらかけ声と共にさらに盛り上げる、という方法で行っていた。これは、自分自身が乗ることにより、仲間にそれを伝え、見物客からの拍手を受け、参加者たちがさらに盛り上がる、という相乗効果をうまく利用した行列といえる。

おわりに

今回の調査により、お囃子には3つの曲があり、その使い方に基本的なきまりがあることがわかった。しかし、参加講中に統一されていないため、独自のやり方でお囃子を使っていたところが多かった。纏の動きについては、膝と腰を柔軟に使い、纏の動きと重心移動をスムーズに行い、5～13kgという重さを利用して、常に馬簾を動かし続けることが重要であることがわかった。

お囃子と纏はそれぞれ独立しているが、一体感（チームワーク）が必要である。

また、参加講中の中で持ち持ち寺を持たない講中、つまり、寺院とは関わりはないが纏やお囃子を楽しむ、という同好会の参加も多く見られた。

さらに、講中のスタイルに様々なものがあるように、行列に参加する目的にも違いが見られた。基本的な形態に則って行っている講中、見物客との一体感、つまり相乗効果により盛り上がりを見せている講中、また、お題目のみを唱えて行列する講中など様々であった。

このように目的の違いはあるが、池上本門寺の万灯行列に参加するという目標を持ち、日々練習に励んでいることはすべての講中に共通していることが

伺えた。

今回ビデオ撮影したのは約1kmの行程のほんの一部でしかないため、参加した万灯講中の動きをすべて把握できたわけではない。しかし、この行列の最終地点の祖師堂前には見物客が三重にも四重にも重なっており、参加者たちはこの地点で、自分たちの動きの中で最高のものを披露したい、という熱意はストレートに伝わってきた。スタートしてから2時間も3時間も楽器を鳴らし続けたり、途中で交代はするものの纏を振り続けているため、疲労も頂点に達しているであろうが、自分の動きの中の最高の演技を発揮できるのは、見物客からの暖かい声援や拍手により、参加者の気持ちが高揚しでき得るものなのではないだろうか。

スポーツ選手が試合後のインタビューで「観客の声援が大きな力となった」とよく答えているが、競技者と観客との関係『相乗効果』の原点が、日本伝統の『お祭り』の中にあるように思えた。

謝辞

本研究の調査に当たり、貴重な資料を提供して下さい、快くインタビューに答えて下さった池上本睦会の皆様に深く感謝いたします。

引用ビデオ及び、引用・参考文献

- 1) 日蓮宗新聞社発行「池上のお会式」VTR
- 2) 成川文雅1980年「日蓮信徒ハンドブック」
日蓮宗文書布教部発行P,261
- 3) 成川文雅1980年「日蓮信徒ハンドブック」
日蓮宗文書布教部発行P,262
- 4) 成川文雅1980年「日蓮信徒ハンドブック」
日蓮宗文書布教部発行P,265
- 5) 成川文雅1980年「日蓮信徒ハンドブック」
日蓮宗文書布教部発行P,260
- 6) 成川文雅1980年「日蓮信徒ハンドブック」
日蓮宗文書布教部発行P,262,263
- 7) 川崎啓一1996年「歴史を読みなおす5近世」
朝日新聞社発行

- 8) 井上功夫1997年「うちのお寺は日蓮宗」
双葉社発行

注釈

大坊気付：池上本門寺の近在万灯講